

「同窓会」

釘本  
光  
作

登場人物

- ・悦子 六十五歳。
- ・直子 六十五歳。
- ・良枝 六十五歳。

秋の午後。隅田川沿いの遊歩道に置かれたベンチ。喪服を来た三人の女が腰かけている。

悦子・直子・良枝 (それぞれ缶ビールを掲げて) 献杯。(それぞれ缶ビールを飲む)

悦子・・・まつさか幸子が先だとは思わなかったなあ。

直子 何が？

悦子 死ぬ順番。

良枝 何それ。

悦子 ウチのダンナ、六十で死んでるしさ、このトシになると、同級生が死んだって言

直子 ってもあんまり驚かないけど、幸子はさあ・・・

良枝 昔っから、健康だけが取り柄って言うてももんね。

悦子 私、たまにスープとかで一緒になることがあって、こないだも立ち話したばっ

直子 かだったからさ、なんか・・・

良枝 そっか。良枝ん家って、幸子ん家のご近所だもんね。

直子 うん・・・

悦子 そーゆーいかにも元気って人が、いきなり赤信号ともっちゃうんだよね。ウチの母親なんか、もうすぐ九十になるうってのにさあ、膝だの腰だの頭だのあちこち悪くて黄信号ともりっぱなしのくせして、未だに赤信号はともないんだから。

良枝 ああ、お母さん、具合どう？

直子 相変わらず。まだらほけって言うの？面会に行くと、調子いいときは、「直子、

仕事は？」とか言うくせに、日によっては、私のこと、自分の妹と間違えたり、

悦子 「母ちゃん！」って言ったたり、もうく話合わせるの大変よ。

良枝 ・・・そっか。

悦子 あ、悦子、これ。(脇に置いていた二つの紙袋のうちの一つを悦子に差し出す。)

良枝 え？

悦子 さつき、おトイレ行ったとき預かったじゃない。香典返しの袋。

良枝 ・・・ああ、そうだったつけ。(紙袋を受け取るが、少し気まずそうに見える。)

悦子 お葬式、結構同級生たち来てたね。

直子 ああ。

悦子 三年のときおんなじクラスで、この辺に住んでる人たちはほとんど来てたんじゃない？

良枝 まあ、夫婦ともに同級生だもんね。

直子 ねえ、悦子。あれ誰だっけ？帰りがけに「もう帰るのかよ」って声かけてきた、

悦子 男二人組いたじゃん。

直子 ああ、堀内君と佐々木君。

悦子 そうだ！堀内と佐々木！びっくりしたよねえ。二人とも、頭寂しくなっちゃってさあ。

悦子　まあ、そうね。

良枝　受付けにいたの誰だっけ？「良枝！久しぶり」って声かけられて、テキストに調子合わせたんだけど、名前出てこなくて。

悦子　奈美ちゃんじゃない？河野奈美。バレエ部だった。

良枝　ああ！そうだ、奈美ちゃん。

直子　人の名前思い出せない時は、悦子に聞けば間違いない！

良枝　記憶力で悦子の右に出るヤツ、いなかったもんね。

悦子　・・・なんか、同窓会みたいだったね。ほら、前はさ、毎年同窓会やってたのに、ここ何年かやってなかったじゃない？

良枝　いつも幹事やってくれてた和代が、一昨年だっけ？死んじゃって。そつから音頭取る人いなくなっちゃったんだよね。

直子　そつか。なんか、若い頃は、友達の結婚式の二次会とかが同窓会と化してたじゃない？けど、このトシになると、友達の葬式が同窓会と化すよね。

良枝　まあ、そーゆーことでもないを集まんないもんね。

直子　私、幹事やろうかなあ。

良枝　え？

直子　同窓会。仕事、今年で定年だからさ。来年あたり、久々に。

良枝　いいねえ。手伝う。

直子　ホント？

良枝　うん。

直子　悦子は？

悦子　え？

直子　同窓会。来年やるとしたら、幹事手伝ってくれる？他の人への連絡とか。

悦子　ああ・・・。

良枝　手伝うよね。

悦子　来年かあ・・・。

直子　三年前が最後だったっけ？屋形船でやったよね。

良枝　ああ、やったやった。飲み放題の天ぷら食べ放題でさあ、結構美味しかったんだよね。あれ、お店の名前、何だったっけ？

悦子　・・・え？

良枝　ヤだ。悦子も来てたじゃない。ほら、この遊歩道沿いに船着き場あって。

悦子　・・・そうだったっけ？

直子　どーしたの、悦子？なんか、さつきからぼーっとしてない？

悦子　・・・ううん、そんなことないよ。・・あ、残された田中君、なんか一気に老け込んだカンジだったよね。

良枝　そうそう。幸子、前の日の夜、フツーに「おやすみ」って寝て、次の日朝、田中君が起きてみたら、冷たくなってたんだって。

直子　ああ・・・。

良枝　自分が夜中に目覚ましてれば、助けてやれたかもしれないのって、田中君、落ち込んでた。

直子　まあ、どうしたって自分を責めちゃうよね。

良枝　うん。

悦子 けど……。

直子 ちよつと羨ましいかも。

悦子 何が？

良枝 ずーっと元気で暮らしてて、ある日突然逝っちゃうのってさ、悪くない気がしない？

悦子 は？何言ってるの？

直子 PPKってヤツか。

良枝 何それ？

直子 ピンピンコロリ。ずーっとピンピンしてて、ある日突然コロリ。

良枝 ああ……

直子 N NKになるよりはさ、PPKを目指したいって気にはなるよね。

良枝 N NK？

直子 ネンネンコロリ。

良枝 何それ？

直子 ピンピンコロリの反対でさ、長いこと寝たきりで、そのまま亡くなっちゃうことだって。

悦子 誰にも迷惑かけずに、コロつと逝きたいもんなあ。

良枝 何言ってるの、やめてよ、縁起でもない。

直子 まあ、でも、ちよつとわかるかな。

良枝 何が？

直子 寝込まずコロつと逝きたいって気持ち。そう思ってる人意外に多いみたいでさ、ピンピンコロリの願いを叶えてくれる『びんころ地蔵』ってゆーのもあるんだって。

良枝 へー……。

悦子 ・・私、そのお地藏さんにお参りしてみようかな。

良枝 ちよつと！

悦子 冗談よ。

良枝 悪い冗談だよ。

悦子 ごめん……。 (良枝から目を逸らし、川の方に目を遣る。) なくんか、すっかりキレイになったよね、この辺。昔はほら、カミソリ堤防とか言ってるさ、川のすぐそばに高い壁があって、川なんか全然見えなかったじゃない。

直子 隅田川テラスって言うんだって。おしゃれだよ。川のすぐそばにカフェがある場所もあるよ。川眺めながらお茶できんの。

良枝 へー。時代は変わったんだねえ。

悦子 この辺でさ、歌の練習したことあったよね。いつだったっけ？ほら、みんなで教室残って練習したら、先生に「早く帰れ！」って怒られてさ。しょうがないから、帰り道、みんなで大声で歌いながら歩いて。

良枝 ああ・・三年生のときじゃなかった？幸子も田中君もいた気がする。

直子 思い出した！三年生の文化祭だ。出し物で合唱やるってなって・・あれ？何の歌だったっけ？

悦子 「明日があるさ」。

直子 それだ。坂本九。  
良枝 さすが悦子、よく憶えてるよね。  
悦子 五十年前のことは、昨日のことみたいに思い出せるんだけどね……。  
良枝 何？  
悦子 ・・・最近のことは、さっぱり憶えらんなくて……。  
直子 一緒一緒。  
良枝 このトシになると、みんなそんなもんでしょ。  
直子 だよね。

けたけたと笑う直子と良枝。悦子は、何やら浮かない顔をしている。

直子 あ、そうだ。悦子。  
悦子 ん？

直子 私、さつきビール代出してもらったんだって。千円札しか無いからさ、おつり貰える？（財布から千円札を取り出して差し出す）

悦子 （一瞬、困惑した表情が浮かぶが、すぐに笑顔を見せて）ああ、いいよ。おごるおごる。

直子 何言ってるの。ダメダメ。

悦子 いいよ。

直子 ダメだよ。

悦子、再び困惑の表情を浮かべるが、あきらめたように、小銭で膨れ上がった財布をバッグから取り出して直子に差し出す。

悦子 ・・・じゃあ……。こつから、お釣り取ってもらえる？

直子、そのパンパンのお財布を思わず受け取る。

直子 何これ？タヌキのお腹みたい。膨らみ過ぎ。重っ！

良枝 ホント。悦子、お金持ち。

笑っていた直子と良枝だが、悦子の表情を見て、笑うのをやめる。

直子 ・・・人のお財布開けらんないよ。はい。（お財布を、千円札とともに悦子に差し出す。）

悦子 ・・・（財布を受け取らないまま）わかんないのよ。

直子 え？

悦子 お釣りとか、お金の計算、よくわかんなくなっちゃって。

良枝 ・・・わかんないって……。？

悦子 認知症始まっちゃったんだって。アルツハイマー。まだ初期らしいけど、時々、記憶が無くなっちゃってることとかあって……。ネンネンコロリへの道まっしぐら。ピンピンコロリ目指したかったんだけどなあ。

直子  
良枝  
……。

悦子 だから、来年の同窓会は、ちよつと無理かな。  
良枝 冗談……じゃ、ないんだ……。

悦子 うん。  
直子 ……でも、初期だったらさ、ほら、今、薬とかあるんでしょ？認知症の進行を遅らせるって。

良枝 ああ、そうそう。そうだよ。私も聞いたことある。

悦子 施設に入ることにしたの。認知症でも受け入れてくれる老人ホーム。

良枝 老人ホームって……

直子 だって……娘さんは？一緒に暮らしてんでしょ？

悦子 娘には迷惑かけたくないの。そりゃあ、娘は、施設なんてって反対したけど、私が嫌なの。自分で判断できるうちに、私の意思で、そう決めたの。だから、来年の同窓会、手伝えない。ごめんね。

直子 悦子……。

良枝 ……。

悦子 昔はさ、今日うまくいなくても、明日はきつといいことあるような気がしてたけど、このトシになると、そうとも思えないよね。

直子と良枝、言葉が見つからず、黙り込む。

悦子 ヤだ。二人とも、そんな顔しないでよ。施設だったって、いいとこなんだよ。ウチからもそう遠くないし、職員の人たちも、みんなカンジ良くてさ、娘も納得してくれて。ご飯もおいしそうだし、毎日の炊事洗濯から解放されるんだと思うとき、なんかちよつとホツとしてんのよ。

辺りが夕焼けに染まってくる。

悦子、川沿いの景色を、記憶に刻みつけるように見つめている。

私、これから、買い物とか料理とか歌を歌うこととか、今までできてたいろいろんなことがすこしづつできなくなつてさ、いろいろんなこと忘れていくんだろぅけどさ、今日のこの景色は、憶えていたいなあ。私にとつての、最後の、同窓会の日の景色。

スマートフォンのアラーム音が鳴る。

悦子 （スマートフォンを取り出してアラーム音を止め）行かなきゃ。  
良枝 へ？

悦子 娘が、そこまで迎えに来てくれるの……今日は、久々にみんなに会えて嬉しいか  
直子 つた。あ、お葬式で会つたのに、嬉しいとか言つたら不謹慎か。

悦子 二人とも、ありがとね。

直子 え？  
悦子 今まで、五十年以上、友達でいてくれて。  
良枝 悦子……  
悦子 じゃあ、元気でね。

悦子、ゆつくりとベンチから立ち上がって、直子と良枝に背を向け、通路に上る階段の方に向かって歩き始める。  
直子と良枝は、黙ったまま動けずにいる。  
悦子は振り向きもせず、なおも階段の方へと足を進める。悦子が階段に足をかけようとしたその時。

直子 ちよつと待ちなさいよ、悦子！

立ち上がった直子のあまりの剣幕に、悦子は思わず足を止めて振り向く。

直子 認知症だから何だつて言うのよ、ちよつとお金の計算できなくなったからってそんな情けない顔するんじゃないわよ。自慢じゃないけど計算なんて、私は小学生の頃からできないわよ！

良枝 直子……。  
直子 だいたいね、認知症はあんただけの専売特許じゃないんだよ。私だって良枝だって、いつそうなるかわかんないんだから。今までできてたことができなくなっていくのなんて、みくんな一緒。みくんな通る道。ちよつと早くなつたからってエラソーな顔すんじゃないわよ！

良枝 (慌てて立ち上がり) そ、そーよ！私なんかね、歯周病酷くなるし尿漏れはするし、あちこちガバガバのユルユルなんだよ、それが何だつてのよ！そのうち入れ歯になるかもしれないし、紙パンツ履くようになるかもしれない。その何が悪いのよ！

直子 尿漏れ？

良枝 そうよ！

直子 ヤだ、私も〜！

良枝 マジで！？一緒じゃ〜ん！

直子と良枝、顔を見合わせて頷くと、悦子の方に向かって駆け出す。

悦子 ちよつと、そんなに走つたら……

直子 何が「迷惑かけたたくない」よ、何が「炊事洗濯から解放される」よ。半世紀も友達やつてきたのに、ちよつと認知症になつたくらいで私たちから解放されると思つたら大間違いだからね！

良枝 来年の同窓会、手伝いはいいから参加しなさいよ！私、迎えに行くから。悦子とこれでもう会えないなんてヤだ！そんなのヤだよ！

悦子の真ん前で立ち止まった直子と良枝、ハアハアと肩で息をしている。

直子　　・ ・ ・ もう、ちよつと走ったら、息切れしちゃったわよ。  
良枝　　私も。  
悦子　　あんたたち ・ ・ ・ バカじゃないの。いいトシしてそんなに走って。ホントにコロ  
直子　　リとこっちやったらどーすんのよ。  
良枝　　いかないわよ。バカカ！  
悦子　　悦子お、もう ・ ・ ・ バカカ！

笑い合う三人の顔が、夕焼けに染まっている。

終わり